

川上健一『雨鱒の川』

片野修

1990年に集英社から初版が出版された『雨鱒の川』の初版本を古本屋で見つけ、タイトルに惹かれて購入した。2004年に玉木宏と綾瀬はるかを主人公に映画化されたことは知らなかった。アメマスをめぐる話だろうと思ったが、その予想は後半に裏切られ、本作品がきわめてレベルの高い恋愛小説であることに驚かされた。

北海道の自然が豊かな村に生まれた主人公の心平はヤスを使って魚を捕ることと絵を描くことが好きな少年だった。幼馴染の小百合は裕福な酒造会社の一人娘だったが、耳に障害があり、音を聴くことができず、言葉も不自由だった。小説の冒頭は川に潜って魚を突く心平とそれを見守る小百合、そしてそこにあらわれる英蔵、アキラ、ヒロシのやりとりから始まる。英蔵は小百合に好意を抱いており、小百合と仲の良い心平に嫌がらせをする。一方で、川でしばしば出会う秀二郎爺は二人をやさしく見守っている。

あるとき、心平と小百合は中学生にからまれる。彼らは魚を捕ることと絵を描くことしか能のない心平の無能を馬鹿にし、耳が聞こえない小百合をあざ笑った。小百合に手をかけた中学生に心平はつかみかかったが、簡単に放り投げられた。とてもかなわないと思われたときに、今度は英蔵が中学生に突っ込んでいった。小百合が傷つけられるのが耐えられなかったのであろう。それでも小学生たちは投げ飛ばされるだけだったが、通りかかった農夫に助けられる。

心平たちが魚捕りをする川は自然にあふれ、魚の隠れ家に富んでいた。そんな川で心平はヤマメやウグイを突いては、小百合やその祖母にあげたり、心平の母であるヒデと焼いて食べたりした。心平の父は幼いころに亡くなり、それからは母が畑を継いで暮らしていた。あるとき心平は、川の中にひときわ大きな雨鱒がいるのを見つける。なんとかヤスで突こうとするが、うまくいかない。その雨鱒は石の間から心平を見ていた。しかし、突こうとするたびに雨鱒には逃げられ、心平は笑われているようだった。そんなことを繰り返すうちに、やがて心平は雨鱒と心が通じているように感じた。雨鱒が心平を見て、口をばくばく動かしているからだ。心平は「お前、どっから来たのせ？」と言ったり、英蔵に捕られそうになると「逃げねば、英蔵に刺されると！」と警告したりした。そして実際に英蔵たちがヤスで突こうとしたときに、心平は川に飛び込んで邪魔をしてしまう。それに怒った英蔵が心平を攻撃すると、小百合が間に入って心平をかばった。やがて小百合も雨鱒の心がわかるようになり、雨鱒が小百合を見て笑ったと言った。次の文章は秀逸である。

「心平は雨鱒と挨拶をかわすと、勢い止めに腹ばいになり、雨鱒と話し始めた。長いこと腹ばいになったままだった。心平は、母のこと、絵のこと、秀二郎爺っちゃん、婆っちゃん、牛や羊たち、小百合のことを、声に出していい、しゃべったかと思うと、しばらくじっと雨鱒をみつめ、うなずいたり、相槌をうったりして、またしゃべり始めるのだった。雨鱒はじっと

して動かず、大きな口を開け、ときたま、心平のまわりをグルリとひと回りしたり、急いで口をパクパクさせたり、背ビレを小刻みに動かしたりした。」

私がこの小説を読む前に書いた『鯉太郎の夢』（本ホームページ収納）では、錦鯉は他の錦鯉やウグイ、オイカワと会話できるが、人間とは話せない設定になっている。しかし、『雨鱒の川』では雨鱒は心平や小百合とだけ意志を疎通させたように描かれている。同じように動物が人間と会話する話は、宮沢賢治の『セロ弾きのゴーシュ』『雪渡り』『なめとこ山の熊』などで知られている。小百合は人間では心平の言うことだけを理解することができた。

やがて大雨ののち心平と小百合が川にもぐると、雨鱒はまだそこにいた。小百合は雨鱒が「さいなら」「すぐ」「お嫁さん」というのを聞いた。小百合は耳が聞こえないから、心の声で読みとったのであろう。確かにそこには雨鱒のメスがおり、二尾の雨鱒は心平と小百合に別れを告げて去っていった。心平は「この小百合ア、大っきぐなったら我のお嫁さんになるんで」と雨鱒にいった。

その後、心平の絵は国際展覧会で特賞をとった。雨鱒を描いたものだった。心平の母と関係があると噂されていた小百合の父、高倉志郎（映画では志郎を助けるために心平の父は命を落としたことになっている）は、心平の受賞を祝う宴を開いた。ここで第一部は終わっている。

第二部では、心平は18歳になっており、川へ行くと秀二郎が釣りをしていたが、何も釣れていなかった。川はコンクリートの護岸に囲まれ、川の水はベルトコンベアーの上を流れているようだった。水中にもぐってみた心平には何も見えなかった。もちろん雨鱒もいない。そこに握り飯をもって小百合があらわれた。二人は変わらずに仲が良く、釣りをする秀二郎をスケッチする心平を、小百合は嬉しそうに見つめていた。

ヒデは心平が特賞をとった日の翌朝、宴会のあとで畑の雪の上で亡くなっていた。着物をきれいにたたんだうえで裸だったが笑みを浮かべていた。このことの原因は私にはよくわからなかったが、映画ではヒデの健康が害されており、限界に達していたとされた。小説の終わりのほうでは、心平の亡くなった父に抱かれてうれしくて亡くなったのだと小百合がいつている。

高倉の会社で働く心平の出来は悪く、志郎は厳しく当たった。一方で同じ職場の英蔵は有能で志郎の期待を背負っていた。やがて志郎は心平に画家になるために東京に出ることを薦めた。旅費を含めた経費はすべて志郎がもつということだった。結局、悩んだ末に心平が断ると、志郎は激しく怒った。志郎には、一人娘の小百合の婿として英蔵を迎え、高倉酒造を継がせるといふ企みがあった。小百合と結婚の約束まで交わした心平は邪魔になっていたのだ。

志郎に心平と会うことを禁じられても、二人は大人の目を盗んでは川で同じ時間を共有した。釣りをする心平と小百合は、「からまった針と赤い浮きを目で追いながら、クスクス笑い続けた。・・・すると川面にすっと魚影が走った。魚は赤い浮きを尾ビレでひと叩きして消えた。小さなさざ波がたち、ゆっくりと波紋が広がった。心平と小百合は顔を見あわせ

た。それから声をあげて大笑いした。二人はいつまでも笑い続けた。心平は竿をあげて、からまった糸をほぐした。その間中も二人は笑いをやめなかった。」

小百合と英蔵の結婚式を前にして、とうとう心平と小百合は村から脱出しようとした。川では秀二郎が舟を浮かべて二人を待っていた。志郎、英蔵そしてその手下たちは、ようやく二人を見つけ、心平を殴り倒して連れ戻そうとした……。そこで何が起きたのかは、本小説か映画を見ていただきたい。

著者である川上健一はそれほど著名な作家ではないが、『雨鱒の川』は少年小説の名作として評価されている。確かに、心平と小百合、そして川の自然と魚を描いた第一部は傑出している。ただの釣りだと、魚の行動や生態はわからない。ヤスをもって川の中にもぐり、魚と見つめ合うことによってこそ、その気持ちがわかるのであろう。耳が聞こえない小百合は心の中で雨鱒と対話した。

第二部になって、18歳になった心平は川の自然がずたずたにされていることを嘆く。全国で進められた川の平坦化と直線化がここでも露呈される。心平がもぐってみても魚は見えないが、おそらく水が濁っていたのかもしれない。自然の変化と並行するように、二人を取り巻く大人たちも変わっていった。純粋な心平と小百合の愛が蹂躪されようとしたときに、心平は自分の意志で村の権力に逆らっていく。幼馴染の恋がいつまでも続いて実をむすぶのは、むずかしいことなのだ。それでも、読者は最後の結末に安堵するだろう。

現代の目線で見ると、親が家業を子に継がせようとするのは滑稽である。小学生のときに特賞をとったからといって画家になれるものでもない。絵を描きたいなら田舎で書けばよい。北海道の川ならば、今だって雨鱒や桜鱒はたくさん溯上してくる。しかし、そういった疑問点は心平と小百合の深い愛情の前に砕け散ってしまう。

映画は2004年に公開された。このときに小百合の幼少時代を演じたのは11歳の志田未来。「女王の教室」で脚光を浴びる1年前だった。大人の小百合を演じたのは19歳の綾瀬はるか。すでにテレビドラマで注目されていたが、初々しかった。映画はアマゾン・プライム・ビデオで見ることができる。